

こけら経の製作技法

— 第86次調査出土の中世木簡 —

はじめに 1974年の第86次調査において、推定約9500点の木簡が出土した。出土木簡の一部は、調査の概要とともに、『平城京左京三条二坊』（奈文研編、奈良市発行1975年）に報告済であるが、その大部分はいわゆるこけら経・笹塔婆などの断片であり¹⁾、未整理のまま保管されてきた。史料研究室では、2005年度からこれらの整理に着手しており、2006年度末の段階で全点の現物確認を終え、釈読を進めている。この作業のなかで、当該資料の製作技法についての知見を得たので紹介する²⁾。

こけら経の製作技法 こけら経は、発掘・伝世を含めて全国で100例余が知られるが、厚さ数mm程度のものと、1mmに満たない薄いもの（以下、薄形こけら経）に大別される。うち、薄形こけら経は台鉋を用いて作られ、台鉋が出現する15世紀半ば以降に出現すると指摘されてきた。ところが、薄形こけら経の製作方法には不明な点もあり、また台鉋以外の工具ではなしえないかの検討は全くなされていない。そこで、伝統的な技術を有する専門技術者による製作実験を実施し、技法を検討した³⁾。

製作実験 実験では、工具として鉋・台鉋・鋸を用い、薄形こけら経の材（以下、こけら板）の作成を試みることにした。なお、こけら板の製作方法は、曾木状の薄い板を用いたとする史料も認められるが（『大乘院寺社雑事記』延徳4年（1492）8月18日条）、通常の木簡と同じく、完成形の大きさの原材（以下、原材）からの削りだしにより、実験は、大きく二つの観点でおこなった。A) 台鉋出現以前の工具でこけら板の製作が可能か、B) こけら経の

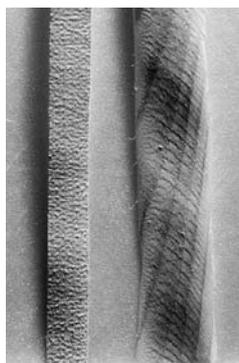


図1 左=台鉋、右=鋸による裏面の加工痕跡

上端にみられる山形ないし五輪塔形の整形がいかなる行程で施されるのか。

実験の結果と知見 A) 鋸を用いた場合、こけら板の製作は困難であった。また、鋸により製作したこけら板は、刃の痕跡が斜め方向に残り（図1）、断面はレンズ形で、あたかも笹の葉のごとき形状を呈していた（図2）。出土遺物にみられる、横方向に



図2 左=鉋、右=台鉋によるこけら板成果物

鉋痕跡の残る、均一な厚さのこけら板の製作は困難であった。

B) 端部の整形方法は、原材をあらかじめ整形した後、台鉋で削り出す方法でも、台鉋で削った数枚のこけら板を重ねて、鑿で押し切る方法でも可能であった。ただし、乾燥した材では、台鉋で削ったこけら板は反り曲がり、伸ばそうとすると僅かな力でも端部の整形部分などに割れが生じてしまう。ところが、水分を含んだ原材を用いたり、削ったこけら板を水に浸した後に広げたりすると、伸ばしやすかつ整形も容易であった。伐採後さほど時間のたたない材ならば、むろん整形は可能と推察される。

まとめ 薄形こけら経は、現在に伝わる技法では台鉋以外の工具による製作は困難であり、従って、出土する薄形こけら経は、台鉋出現以降の遺物と認定できる。製作技法のさらなる追究が、必ずしも紀年銘をもたない資料の年代決定の一助となろう。（山本 崇）

注

- 1) こけら経と笹塔婆は、1文字以上の経文を記したこけら経と、梵字や法名・名号などのみを記した笹塔婆に区分されるが、その分類は記載内容によるもので、形態や製作技法に明確な差違は認めがたい。以下、製作技法の検討は両者を一括しておこなう。
- 2) こけら経とその製作技法は、辻村泰圓ほか編1975『日本仏教民俗基礎資料集成 第6巻 元興寺極楽坊VI』（中央公論美術出版）、原田憲二郎・松浦五輪美1993『柿経の考察』（『奈良市埋蔵文化財センター紀要1992』）、藤原理恵2006『こけら経に関する考古学的考察』（『真朱』6）などを参照。
- 3) 製作実験は、2006年8月29日、9月28日の両日、(株)瀧川寺社建築の瀧川潔・大久保泰啓両氏、平城宮跡第一次大極殿正殿復原工事竹中・浅沼・森本特定建設工事共同企業体作業所長の西川公三氏、(財)文化財建造物保存技術協会の高藤修治氏らのご協力により実施したものである。

本稿は、福武学術文化振興財団研究助成「平城京跡出土こけら経の整理と保存にかんする研究」の成果の一部である。